

平成 21 年度野幌自然環境モニタリング検討会
(第 9 回：現地検討会)
議事次第

平成 21 年 10 月 6 日 (火) 10 : 00~12 : 30
野幌国有林 41 林班、森林の家ほか

1 開 会 (森林の家)

2 日程等説明

3 現地検討

- ① 41 林班：半処理区
- ② 42 林班：北海道ボランティア協会 再生活動箇所
- ③ 48 林班：間伐予定箇所の希少生物調査箇所

4 室内討議 (森林の家)

- ・ 野幌での鳥類相調査 (酪農学園大学環境システム学部助手 鈴木 透)
- ・ 野幌森林公園内のアカエゾマツについて
- ・ 野幌自然環境モニタリング調査方針について
- ・ モニタリングパンフについて

5 閉 会 (森林の家)

野幌自然環境モニタリング検討会出席者名簿

(平成21年10月6日)

委 員

- 春木 雅寛 北海道大学大学院地球環境科学研究院准教授
平川 浩文 森林総合研究所北海道支所森林生物研究グループ長
堀 繁久 北海道開拓記念館資料情報課長・学芸員
村野 紀雄 酪農学園大学環境情報システム学部教授
矢島 崇 北海道大学大学院農学研究科教授 (座長)

～50音順～

鳥類調査情報提供

- 鈴木 透 酪農学園大学環境情報システム学部助手

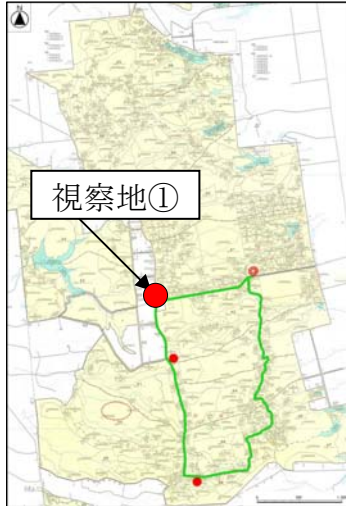
事務局等

- 岡本 雅人 北海道森林管理局企画官 (自然再生)
志鎌 陸 石狩地域森林環境保全ふれあいセンター所長
三上 貴司 (社)日本森林技術協会北海道事務所

ほか

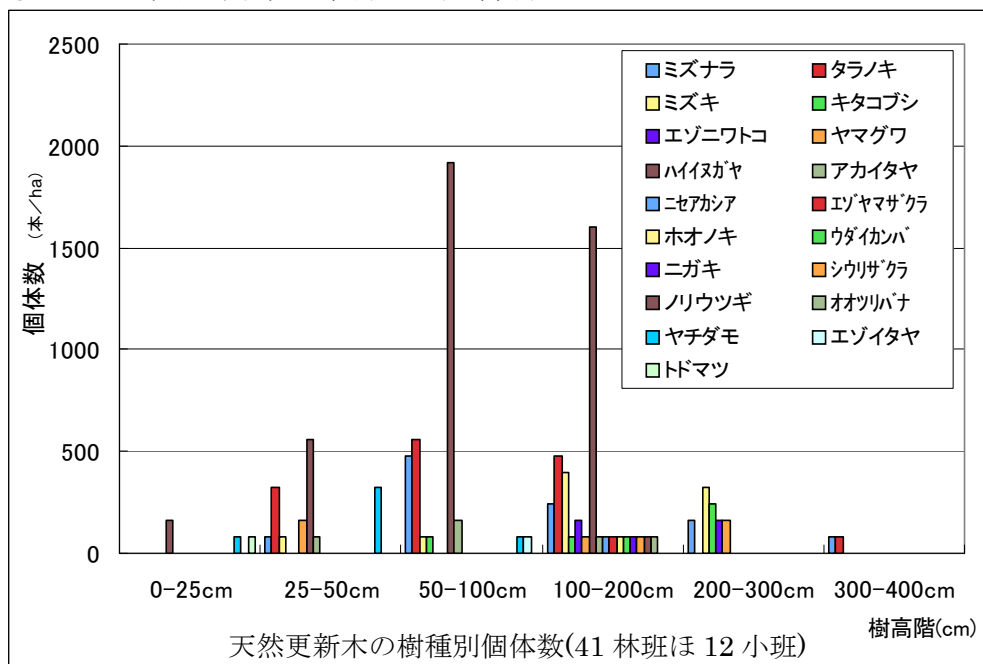
視察地①：41 林班ほ 12 小班 半処理区

風倒木整理後非処理区（風倒木を搬出済み・植栽はせず）



2007年秋(台風の翌々年)の状況

≪森林相調査 天然更新木の樹種別個体数≫



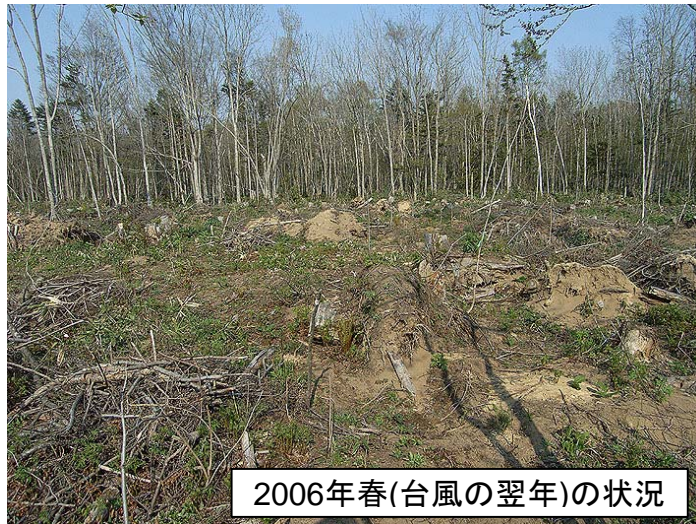
・平成 18 年度調査 ニセアカシアが 1600 本/ha あった。
 ・平成 19 年度調査 新たな定着個体（25 cm以下）は見られなかった。
 ササの被度が 70%以上のプロットが見られた。

・平成 20 年度調査 高木種の定着が見られた。
 ササ類の被覆には急激な拡大は見られない。

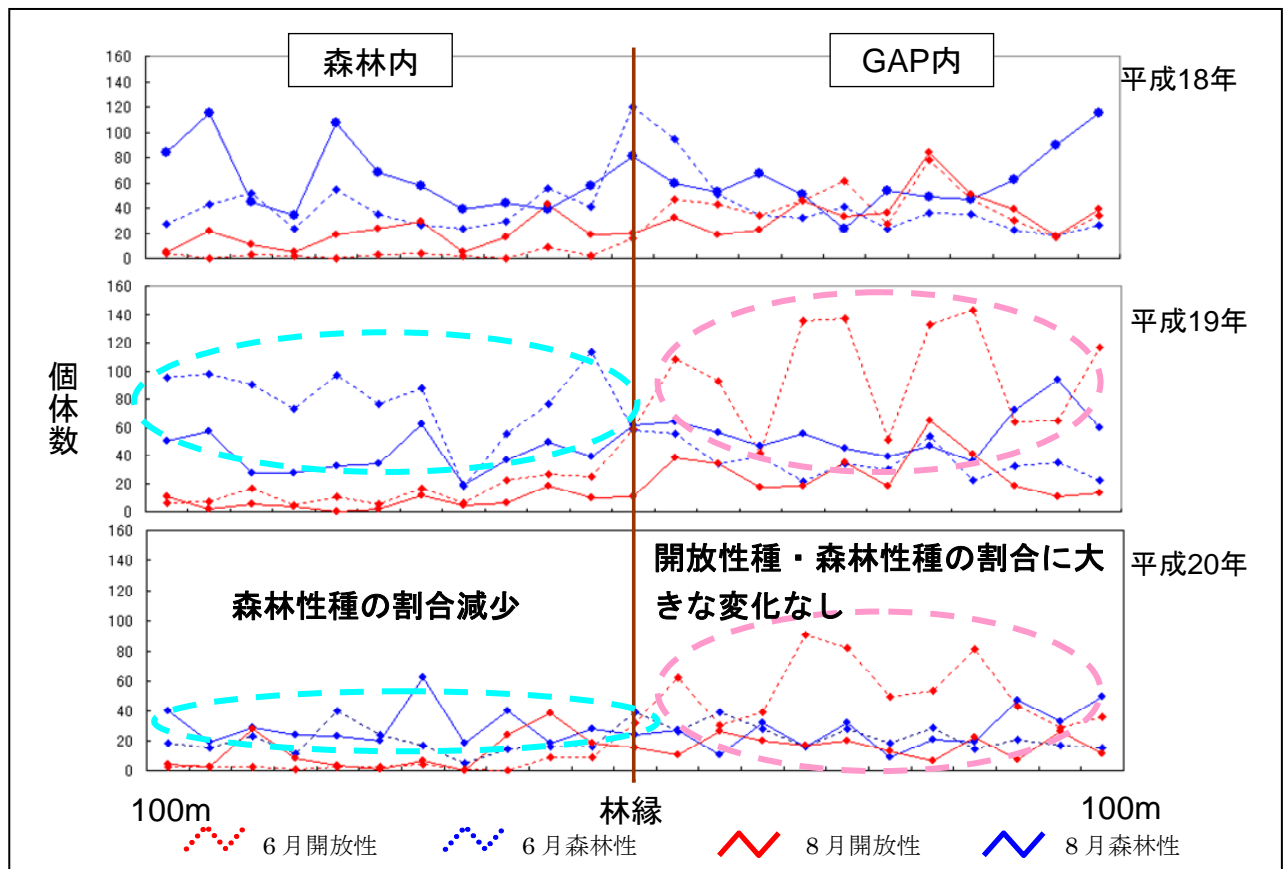
⇒今後、高木種の新たな定着が進むものと思われる。（H20 年度報告書より）

視察地②：42 林班か小班 再生活動箇所

人力地ごしらえ実施・トドマツ、ミズナラ、ヤチダモ、カツラ、ケヤマハンノキ植栽

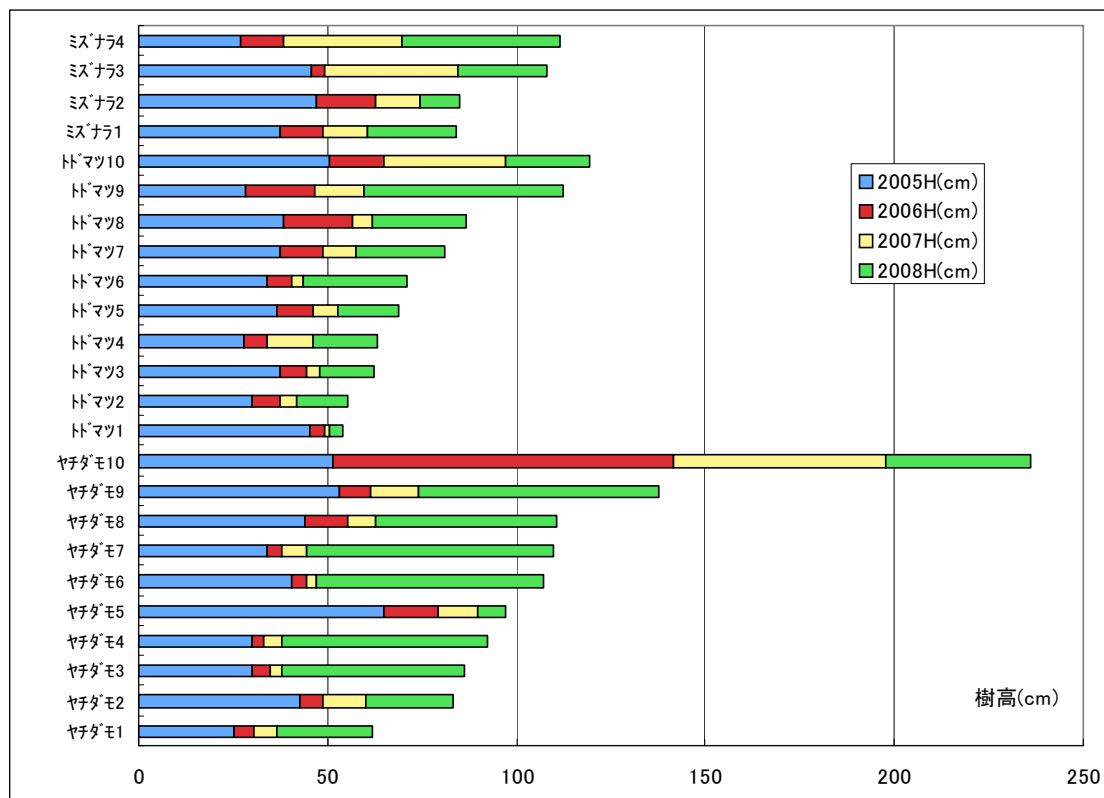


《歩行性甲虫捕獲個体の変化》

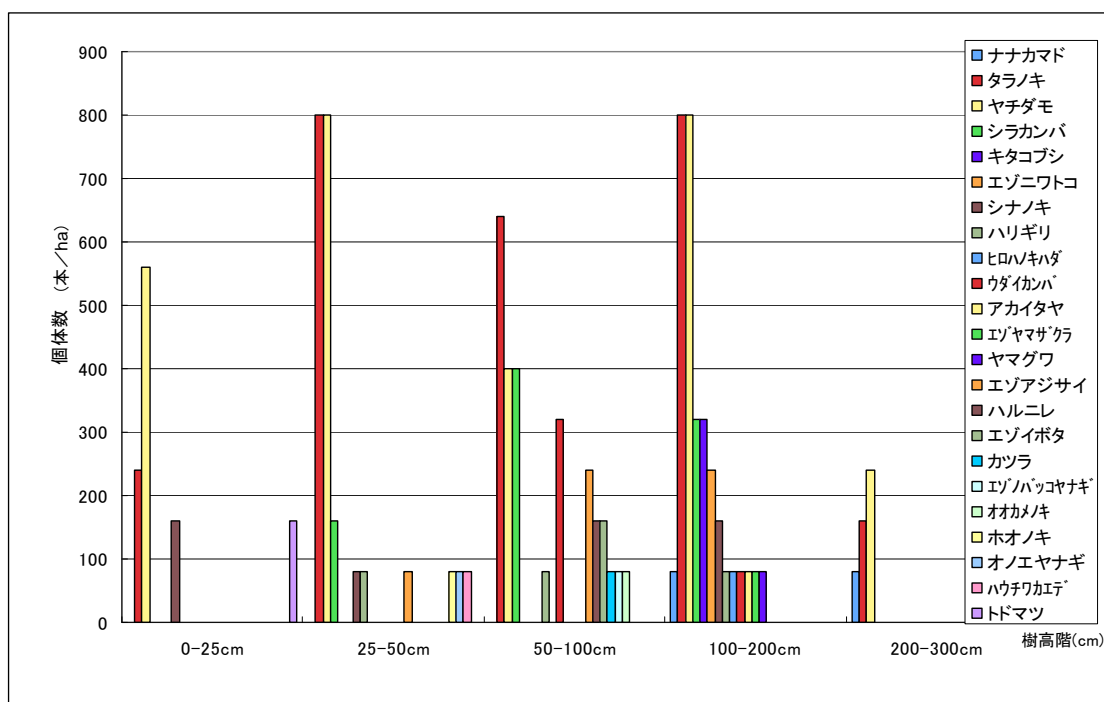


- ・ 林内、林縁部で森林性種の割合が減少⇒天候不順やその他の影響
(全体の捕獲頭数も8割に減少)
- ・ 風倒被害箇所では開放性昆虫、林内には森林性の歩行性甲虫が優占する

≪森林相調査 植栽木の成長量と天然更新木≫



- ・ 植栽木の成長は順調 (概ね樹高 1 m 程度で 2.5m の個体も見られた)
- ・ 昨年度と比較しても成長は順調



- ・ 多くの高木種の天然更新木が見られる
- ・ 樹高 25 cm 以下の高木種としては、ヤチダモ、タラノキ、シナノキ、トドマツ
- ・ オオアワダチソウが見られる
- ・ ササ類の被度の増加は見られず、植栽箇所への侵入はあまり見られない

風倒被害地の回復段階について

◆森林の再生が進む中で考えられる状況（植栽区の場合）

参考：野幌自然環境モニタリング調査方針（H18）

第1段階（台風直後の状況）

項目	状況	イメージ
風倒被害箇所の森林植生	筋状に地拵えが行われ、植栽されている。周囲の残存林分には、天然更新による稚幼樹及び下層植生がみられる。	
歩行性甲虫相	風倒被害箇所において開放性の昆虫が数・種数ともに多くみられる。林内には、森林性の歩行性甲虫が優占する。	
菌類相	風倒被害箇所においては、倒木から発生する木材腐朽菌がみられる。林内と風倒被害箇所における菌類相には大きな違いがみられる。	

第2段階

項目	想定される状況	イメージ
風倒被害箇所の森林植生	残存林分などから種子が散布され、多くの天然更新稚樹が林床にみられるようになる。植栽木が十分活着し、樹高成長が旺盛となり、地床を被覆する。	
歩行性甲虫相	開放性昆虫の割合が減少し、森林性の歩行性甲虫の割合が増加する。	
菌類相	林内で見られる菌類相が、風倒被害箇所にまばらにみられるようになるが、風倒木から発生する子実体が依然として多くみられる。	

第3段階

項目	想定される状況	イメージ
風倒被害箇所の森林植生	風倒被害箇所全体で天然更新稚樹が多くみられ、樹高数mに達する活発な成長がみられる。植栽木はある程度間引かれた状態になるが、樹種によっては樹高1.3mを超える。	
歩行性甲虫相	開放性の昆虫類は数・種数共に減少し、森林性の歩行性甲虫の組成が、風倒被害箇所と良好な自然林との間で差がなくなる。	
菌類相	風倒木から発生する子実体が減少する。林内でみられる子実体が風倒被害箇所でもみられるようになる。	

菌類相調査の結果概要（2008 年度）

	処理区(再生活動地区)	天然林区	人工林(被害なし)
全区で見られた種	ウスバシハイタケ		
平成20年度 特徴的な種	カワラタケ・レンガタケ	カワラタケ	モミサルノコシカケ
		サカズキカワラタケ	
H19年度 特徴的な種(参考)	カワラタケ	ヒメキクラゲ	モミサルノコシカケ
	スエヒロタケ	サカズキカワラタケ	
特 徴	平成19年度と比較すると、スエヒロタケが減少しレンガタケが増加。	出現種総数が多く、特定の種が優先している状況は見られない	処理区と天然林区の中間を示す
	アラゲカワラタケ、トマツガンシュビョウキンが姿を消した	(H19と同様)	(H19と同様)

平成 19 年度と比べると

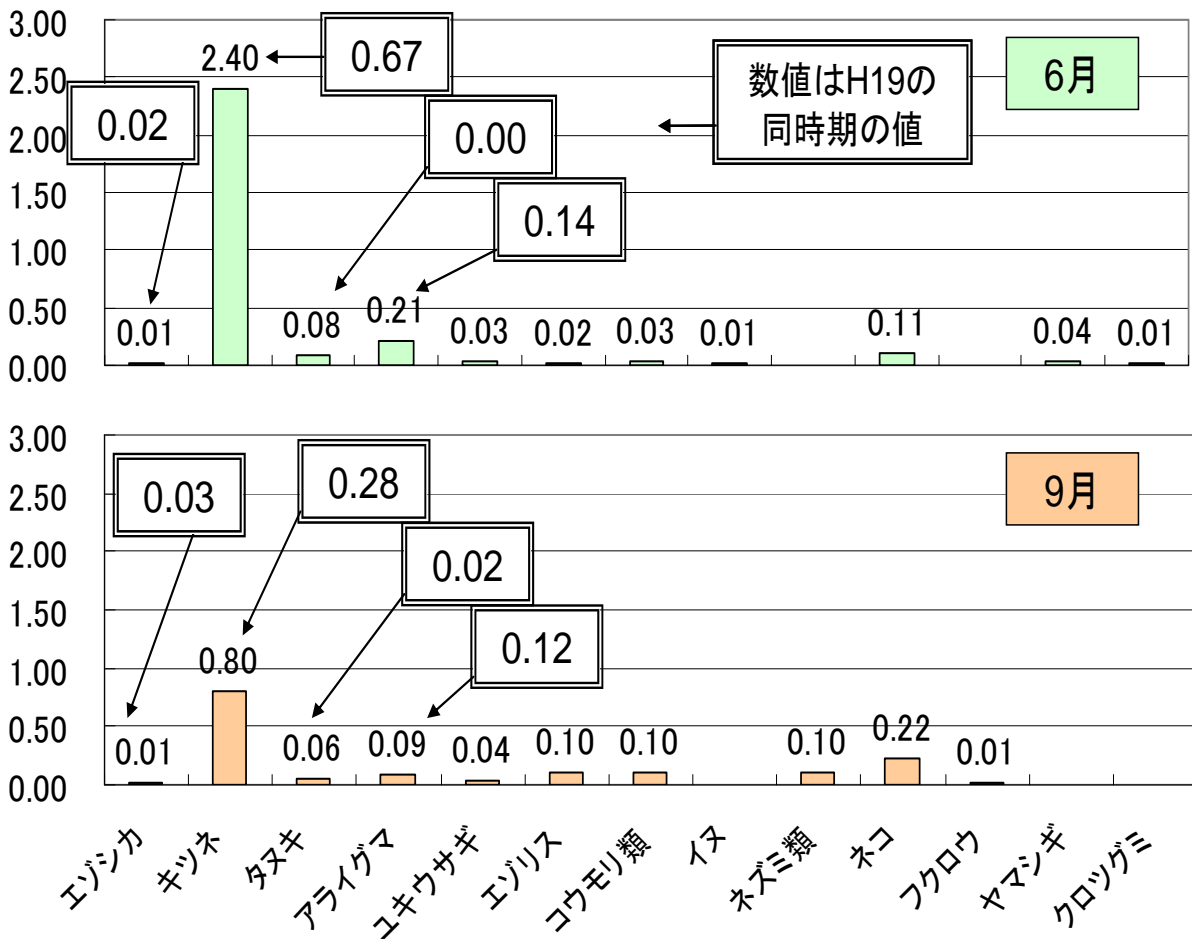
- ①天然林区・人工林（被害なし）における森林には大きな変化は見られず
- ②処理区（再生活等地區）においては風倒被害後に発生した枯死木の分解が進み始めている

《処理区での再生段階》

枯死木に依存する菌類が見られる
森林性の菌類が見られ始めている状況ではない

回復の傾向が見られるが、段階としては第1段階である。

野生動物自動撮影の結果概要（2008年度）



- キツネの撮影頻度が最も高い
- アライグマの生息頭数はおおよそ横ばい状況であると考えられる
- エゾシカは撮影頻度が低く、現段階では生息密度はそれほど高くない